

教育長賞の選評

終原小学校 五年 鶴田 成貴 「十五夜の 月を明りに すもうとる」

「十五夜」は毎月あるものの、俳句の季語としては仲秋の名月をいいます。この「すもう」は、十五夜の行事かも、または個人的なものかもしれませんが、名月を愛でるといふ風習と相撲という伝統技との組み合わせが、懐かしい印象を与えています。

垂水中央中学校 三年 川畑 英侃 「ウグイスの 初鳴き聞いて びわ熟れる」

「枇杷の花」は冬の季語ですが、ここでは「ウグイス」という春の季語で早春を表しています。「初鳴き」と「びわ熟れる」という、一見この両者の季節感の差異に疑問をもたせながら、温暖地ならではの生命の活動をよくとらえています。聞いたのは作者ともとれますが、枇杷の木との方より効果的でしょう。

垂水高等学校 三年 林 美幸 「雪兔 白さが何故か 温かい」

美しい一句です。鹿児島には珍しい昨冬の大雪に「白兔」を作ったのかもしれませんが。雪のもつ冷たいという一般的な印象を、「温かい」と表現した意外性がこの句の印象を鮮やかなものにしていきます。「白さが何故か」と疑問を説明しようとせず、そのまま表現したこと、より効果的になっています。

講評

小学校

俳句は五七五の三語しか使えませんが、その一語一語を効果的に使わなければなりません。例えば、特選作の「目覚めれば磯の香りと波の音」は、視覚と嗅覚の世界を上手に組み合わせた好句です。「ばく発で入道雲がもう一つ」もすばらしい観察ですが、「ばく発」が鹿児島に住む人には分かりませんが、他では何のことか分からないという難点があり、残念な句です。言葉のもつ深みと広がりとを考えて、俳句を作ってみてください。

中学校

俳句の歴史は古く、元禄時代の松尾芭蕉の頃、俳諧の発句が独立して、現在の俳句になりました。その時に、俳諧のきまりを踏襲して、五七五の十七字の定型詩形と季題を入れるという約束ができました。このようなきまりを窮屈だと考えて無視する俳人もいますが、そのきまりの中で、いかに自由に表現するかという苦労は、また俳句を作る人の最大の楽しみでもあります。みなさんも、定型詩という拘束のなかでの自己表現を楽しんでください。サッカーも九十分というきまりがあるので、面白いといえます。

高等学校

表現の面白みに気づいた句の一例として、「糸瓜たちよんごひんごのへそ曲がり」は、「よんごひんご」という方言を知らない人にも、いかに糸瓜の曲がりくねった様子が目に浮かぶ表現です。言葉に対する感覚がすばらしいと感じました。このように言葉は意味だけではありません。その感じやリズムや雰囲気や、意味以外の要素を多く兼ね備えています。そのような要素を総動員して、俳句を作ってみてください。そうすると、言葉のもつ、そして俳句のもつ表現の面白みが分かってくることでしょう。